

時評



佐藤 洋一郎

(総合地球環境学
研究所教授)

大学を中心に、新型のカルトが勢力を広げつつあると新聞やテレビが報じている。韓国人の教祖には性犯罪の容疑がかけられているという。宗教に名を借りた悪質な犯罪だ。以前、とあるカルトが勢力を拡大したときも県内の大学などで学生信者が問題になったことがあった。大

学生を狙う「新型カルト」

学もマニュアルを備え、啓発のためのピラをまき、相談室を置くなどして対策に努めてはいるが、カルト集団も常に新手を考へ、盲点を突いて大学の社会に侵入してくる。実効ある対抗手段はなかなかない。

最近の学生は昔の学生に比べ

観察力、判断力の養成を

考えることも少なく、また、生活力を鍛えられることなく大学に入ってきた学生が多い。要するに過保護である。そのような、過保護でひよわな学生は、カルトの側からすれば格好の餌食であるに違いない。

この分析が正しいとするな

ルに頼りがちだが、危機はマニュアルどおりにはやってこない。とっさのときの観察力と判断力が、不意に来る危機から身を守るのには決定的に重要である。そのためには日ごろから、さまざまな体験を通して観察力や判断力を養っておくことが大事である。また

親や教師が、い

理能力を高め、自己の判断に基づいて行動できるようにしておくことはいろいろな意味で重要である。過保護に育てられ、自己判断できない子が親になったとき、その子はいったいどうなるだろうか。過保護とひよわの連鎖を断ち切らなければ、カルトの問題はいつまでもなくなり

執筆者略歴

さとう・よしいちろう氏
京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。

ると幼く、また、批判精神にも乏しいことは大学関係者が一致して認めるところである。それは大学の問題というよりはむしろ今の日本社会がかかえる問題だ。小さいころから身の回りの危険は親や教師によって取り除かれ、危険に接する機会が少ない。受験一辺倒で社会について

ら、新型カルトに対する一つの有効な手段は、子どもをいちはやく自立させ何ごとも自分で判断できるように日ごろから教育しておくことだろうと思う。身の回りの危険が増しつつある今、これは逆説的な言い方に聞こえるが、こは急がば回れである。さらに今の世はとかくマニユア

いことを知るべきである。子どもを狙う卑劣な犯罪やさまざまな事件、事故が頻発する現在、子どもにさまざまな体験をつませることは勇気のいることだと思ふ。どうしても過保護になる。しかし大学に入って一人暮らしを始める前にできるだけ多くの体験をつませ、危機管